

滝野川クロニクル 2022

土地の亡霊と自然の召喚祭

藤井雅実

滝野川は、東京北部に流れる石神井川の別名で、その川が通る北区の街の名でもある。「滝野川クロニクル 2022」は、その滝野川地域に関わる歴史や環境を探り、そこに潜むものを様々な観点と技を介して喚び覚ます試みだった。多様な物や資料や映像で描き出された滝野川地域、その“多岐の流れ”が響き合う不思議な空間……そして、それらの間隙や余白から、その地に潜む亡霊たちの気配も漂ってくる。

アートイベントに地域の名が冠されると、地域活性を求める「地域アート」という枠で括られる傾向もあるが、この企画はそうしたものではなかった。「クロニクル」という名が示唆するように、滝野川という名に関わる地域の歴史を探り、かつて「軍都」とも言われたこの地に潜む遺構の断片を掘り返したり、滝野川地域の自然と街の今昔の姿を重ね合わせる。そうして、この地を織り上げている古今の様々な情景が解きほぐされ、織り直されて、新たな情景を喚び覚ます。

会場として選ばれた北区中央公園文化センター。そこに近づくと、木々に包まれた庭の奥、歴史を感じさせる白亜の建物は、昭和初期、東京第一陸軍造兵廠（武器の製造・統括機関）本部として建てられたもの。そして戦後は米軍が一带を接收し、キャンプや極東地図局として使われ続け、ようやく 1971 年に返還された。そして 81 年以降、公共施設として活用されるようになったという（註 1）。

このように会場自体が、今は綺麗に整った市民の公共施設の姿の背後に、昭和の戦争の痕跡や亡霊の層を重ねているアイコンでもあった。



1 : 召喚される時の古層の痕跡群

会場の部屋に入ると、壁際にあるガラスケースが目にとまり、美術イベントとは異なった雰囲気がある。戦時期の資料や古い幻灯機やタイプライター、滝野川周辺の古い地図や様々な関連史料、当地での学生運動を記す書籍などが、複数のケースに陳列されていた。この企画を立てた**松原容子**さんや参加者の**山本亜矢**さん、**市川平**さんらが用意したこの地に関わる様々な資料のアーカイブ。



A室 展示ケース 壁左；大内三枝「北区を訪ねる」
壁面映像；松原容子・坂井奈桜子・他「滝野川クロニクル」

その中にある大本営報告の記事など、実物を見ると、今のウクライナを巡る情報戦も重なり、人間社会の相も変らぬ危うさが現実感を強める。**市川平**さんの祖父が戦中に作られたという絵本は、楽しい仕掛けを持つ素敵なもの。しかしそれも物語の後半ではアメリカのビルを破壊する物語。子供のための自筆絵本、出来が良い分、その裏面の危うさも切迫感を際立てる。

ケースの上の壁には、**大内三枝**さんが作った「「戦争を訪ねる」北区滝野川編」という地域史のような紙片が掛けられ、下の資料群と呼応している。しかし、その本文は白い塗膜に覆われて、それが記述する対象が歴史と社会の塗膜に覆われていることを、感覚的にも表示している。

そして部屋の中央には、**松原容子**さんが作ったアメリカン・アップルパイが置かれ、戦後 GHQ 統治下で人々の日常感性が急激にアメリカナイズされた変化のアイコンのように、放置されたままになっている。このように、会場に入ってすぐの印象は、美術展というよりも特異な疑資料展の趣がまず漂っていた。

しかしその部屋の壁を不思議な光が動いている。部屋の中央部に置かれた映写機が回転し、そこから出た映像が周囲に旋回しながら投影されていた。**松原容子**さんが撮り**坂井奈桜子**さんが音楽を付けた、豊かな木々に囲まれた滝野川周辺の情景。この地の現在の映像が、過去の資料や像や装置が並ぶ棚の上の壁面をゆっくりと撫でていく。発掘された遺物やそこに記された過去の象徴的記号群や画像に、今日という別の時の生きた映像が重なって、時の層をなす場が生成し変化し続ける。（註2）

そして中空には、不思議な形の切り抜きが、天井から紐と枝でぶら下げられ浮遊している。**山本亜矢**さんが紙で切り抜いた、滝野川周辺に住まう鳥や魚や動物たちの群れ。地域の生き物たちが、切り抜きという痕跡像となって、ガラスケースに収められた歴史的文献や窓外の森を背景に、上記の滝野川地域映像の投影光も受け、柔らかく揺れ動いている。



右浮遊物：山本亜矢「滝野川の生き物たち」

さらに奥の壁際には淡彩の絵が並ぶ。軍都と呼ばれた当地にかつてあった陸上自衛隊の駐屯地、今は一部だけが残る軍用鉄道用のトンネル、そして火工廠で作られていた風船爆弾。この地の時の古層に潜む危うい歴史の亡霊が喚び覚まされ、**浅野順**さんの素描と淡彩の繊細な趣が、かえって描かれた対象に潜む危うさを伝えるかのようだ。



浅野順「トンネルポータル / モニュメント」「トンネルポータル / 排除された記憶」
「風船爆弾 / オレゴンの悲劇」「陸上自衛隊十条駐屯地」

もう一つの壁には「音無川の周辺」と記されたパネルがある。滝野川は冒頭に記したように、石神井川と一般には呼ばれるけれど、音無川という名も持つ。地域や時代によって様々な名を持つという滝野川。**大内雅彦**さんが詠えたそのパネルには、音無川≒滝野川周辺の地図が描かれ、そこに生息する様々な鳥の姿が付されている。その名の屈折を重ねた歴史を含め、浅野さんが描いた軍都の姿と共に、この今も豊かな自然もまた、この滝野川の地を織り上げる長い時の層をなす。



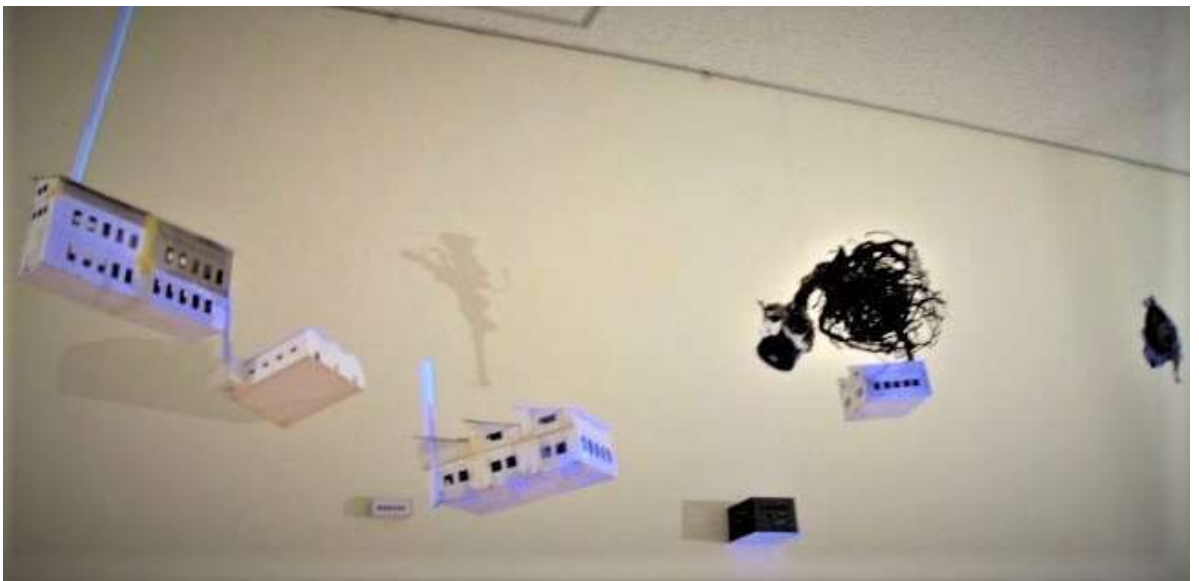
大内雅彦「音無川の周辺」

2：浮遊する戦争機械の亡霊たち

奥のB室へ入ると……こちらでも中空に色々なものが浮遊している。松原容子さんが紙で作った旧陸軍の兵器工廠や倉庫、製紙工場などの模型。その実在も歴史的意味もイメージも重い構築物たちが、紙という軽い素材で再現されて、重みを欠いて浮遊している。その軍事や工業関連施設と対極的な、植物の根が土と共に絡み合った塊という生々しい自然物も漂っている。さらに床には、この地がベトナム戦争時に傷病兵の病院となったことを示唆するベッドの模型が並ぶ。

その浮遊物の群れは青白い光を受け、それが亡霊めいた趣を強める。部屋の中央に置かれた発光体と、もう一つ、部屋を往還している発光体の光がある。

部屋の中央には、その光を受けたテーブルがある。その表面は世界地図。青山悟さんが昭和期の古い工業用マシンで描き出したもの。光の変化に応じてクローズアップされる地域が変化し、覇権状態や紛争地域を浮かび上げる。その上には丸い時計が吊られている。よく見ると針が逆回転している。文字盤も刺繍で織り上げられ、この会場の文化センター玄関前で奥様方が舶来マシンの話をし、抱き合う恋人たちもいる。まだこの場が米軍の関連施設時代、戦前の鬼畜米英から欧米追従へ転じた高度成長期の一情景を、逆回転時計が時を遡及して喚び醒ます。



松原容子「製紙工場」「工廠」「樹木」他



青山悟「逆転時計」「ブルーインパルス」

市川平「電気機関車」

そして、浮遊物たちの浮くこの空間を行き来している強い強い発光体。それは古い機関車のリアルな模型に付けられている。特殊照明作家の**市川平**さんが、中央の光源と共に設定した、戦中、軍事施設もつないだ電気機関車。松原さんや山本さんの紙の建物や生き物たちと対照的な強い実在感で行き来している。そこに付された電球の強い光が機関車と共に中空を移動するにつれ、下に置かれた青白い光（ブラックライトだそうだ）と共に、部屋の浮遊物たちの存在感の強度を変化させている。

さらに部屋の奥の側では、振じった紙のような浮遊物たちが旋回している。近寄ると、先端に小さな戦闘機があり、振じられた紙はその排気ガスようだ。コロナ禍の中で遂行された東京五輪時、元・陸軍兵器工場だったこの建物上空を飛んだ自衛隊機ブルーインパルスの群れ。これも**青山悟**さんが刺繍を施した紙の模型。そのテールからは、その記念飛行に対するネットのコメント群を記した紙片が振じられ、排ガス状に噴出している。戦争機械のカッコ良さという美的イメージに伴う危うさを示唆するかのよう。

そしてそのそばに、二つのマスクがキスし合うように接して浮いている。表面に PLEASURE（喜び）と FEAR（恐れ）と刺繍されたマスク。コロナ禍で世界中の何十億もの人々の顔を覆うマスクが、過去の軍事施設や今日の戦争機械たちの群れと共に中空を漂ってキスをして、パンデミックや戦争の不安の中でも求められる喜びが、周囲の戦争機械たちと絡み合う。



松原容子「滝野川周辺マップ」

ここで最初の部屋の方へ目を戻すと、戸口から向うへ、床に妙なテープが貼られていることに気づく。それを追って最初の部屋に戻ると、床一面に、青と白と黄色のガムテープが不思議な模様を描いている。ああ、地図だ。**松原容子**さんが会期中に、パフォーマンスでガムテープを張りながら描き出した滝野川周辺の略地図イメージ。最終日には、過去にあった王子野戦病院反対闘争の現場が×印を加えられた。その人間界の〈事件〉は、壁にある**大内雅彦**さんの「音無川の周辺」の地図や鳥たちの自然界の穏やかさと、対照的な響きで絡み合う。

(※会場の動画。浮遊物たちは、会期中、上記の配置とは異なる配置にもされ、この動画では、自衛隊機の一部と機関車が手前の部屋で浮遊している。撮影＝浅野順：
<https://twitter.com/JunThursday/status/1527648309069770753>)

さらに会期中には、建物周囲の庭園を**坂井奈桜子**さんの演奏と**市川平**さんの照明効果の競演で巡るパフォーマンス、**松原容子**さんと**松原卓**さんによる「本と包帯」パフォーマンス（小熊英二著の『1968 若者たちの叛乱とその背景』の米軍施設問題でのデモの部分を読み、参加者を包帯で結んでいく。人間社会の不安な拘束と、それに対抗する連帯を象徴するかのよう）、この戦争機械と自然、社会の構造的な不安と連帯、そしてその古層の基盤をなす自然の中を踊りで繋ぐ、**相良ゆみ**さんと**万城目純**さん率いる舞踏グループ・**ホワイトダイス**らのダンス・パフォーマンスなども行われた。筆者はダンス・パフォーマンスしか見れなかったが、これらもまた、この地に潜むものたちの召喚儀礼のようだ。



松原容子 パフォーマンス「本と包帯」、床面にテープによる略地図

3：土地に潜む亡霊群のアナクロニクル（錯時列）を開くクリプトグラム

こうして会期を通し、会場全体が、滝野川地域の空間と時間の中で蓄積された、軍都と呼ばれた過去の痕跡の発掘を一つの焦点としつつ、自然から街の情景までの隠れた諸相を織り上げる〈暗号・秘文 = cryptogram〉を綴り続けていた。

まず、かつて軍都と呼ばれたこの地の、太平洋戦争期の、大本営発表の公的資料から家族の遺した私的な資料までのテキストや映像や画像から日用品などの遺物の群れ（擬 - 作品）があった。その中で、軍都の遺構を繊細な筆致で描く四点の絵は、額装された絵画という大文字の「芸術作品」として自らを示し、当イベントの芸術展という特性を印す〈作品 - 枠 (par-ergon)〉としても機能する。

空中には、当時の重厚な軍関係施設が、華奢な紙素材で再生されて宙に漂い、床には軍病院の病床ベッドが並ぶ。その中を、軍施設と街を結ぶ機関車が、重厚な実在感と共に強烈な光線を発しつつ往還する。その傍らで逆回転時計が、このイベントの時間の遡及的機能を暗示しつつ、自らの盤面には、大戦と今日とを媒介する戦後のアメリカナイズされた庶民感覚を素描する。その周囲を、今は五輪など国家的行事の祝祭に舞う自衛隊機…戦争機械という実質を潜めた戦闘機…その模型が、それを巡るネット空間の発話群の痕跡を排出しつつ周遊する。

こうして、戦時下の日本軍から戦後の米軍や自衛隊など軍関係のアイコンが空間全体を漂う間隙に、滝野川流域の魚や鳥や動植物のイメージや痕跡が絡み合う。そして、その舞台となる会場自体が、かつての日本軍から戦後の米軍の施設とされていた歴史を、今では市民の公共活動の場という相貌の下に潜ませている。

時間と空間、自然と人為、実在と亡霊、言語とイメージなど、多様で異質な諸層が錯綜しつつ積層している地域の<錯 - 層構造>を、このように、参加者それぞれが、それぞれの感性と知性と技の特性に即して探る。そして、それぞれ異質なプレゼンテーションが絡み合い、単なる文献や史料のアーカイブの実証記述などとは異なった過去の痕跡が象られた。その痕跡の群れに、今もなおその深層に憑いている<亡霊

specter/revenant >たちが寄り添って回帰して、人々の構想力に問いかける<暗号・秘文 = cryptogram >の<綾織り texture >を織り上げていた。

この、物とイメージと記号の群が、様々な層で錯綜して絡み合うクリプトグラムに、観客もまたそれぞれの異質な感性と知性で呼応して、この滝野川という特異点の、未見で未聞の諸相への開道が探られる。

新種のウイルスという自然界の他者が、人間たちの環境破壊を叱るかのように世界を覆う中で育まれたこの企画の、その準備段階で、さらに大国の異国への侵攻という思いも寄らなかった異常事が勃発した。この不幸な事件で、現代都市に潜む過去の戦争遺構を召喚したこの滝野川クロニクルは、その遺構の像を、過ぎ去った過去の痕跡ではなく、「今日の<現実>に、潜み憑いている亡霊のアイコン」として浮上させることにもなった。

この国でも、ウクライナの戦争状態などを受け、防衛力増強などという危うい政策が提出される今日。人間が古来、繰り返し続ける戦争という、他の動物たちの闘いとは破壊規模が桁違いの、動植物たちにも途方もない害を与える振る舞いは、過去の遺物ではない。

滝野川クロニクルというイベントは、滝野川という一つの地域の古層に潜む、過去の戦争の遺構の姿や記号の発掘と共に、その亡霊たちの像を象っていた。

そこに、軍都の像と共に提示された滝野川流域の、多様な動植物らの育む自然と街の穏やかな形や映像が重ね合される。その自然と人々が積み重ねた時の古層は、幾多の殺戮と自然破壊を繰り返した人類の歴史をはるかに超えた時間の層を、軍都やそれを遺構とした今日の滝野川地域の基盤に湛えている。

その自然という基盤の層から、争いを反復し続ける人類社会のいくつかの遺構とそこに潜む亡霊たちを召喚し、その上に今のこの地の姿が重ね合され、時の層構造の錯綜を織り直し、異質で多様な時と場の“多岐の流れ”の一面を波打たせたこの舞台は、「滝野川」という一つの地域を超えて、限りなく多岐の側>へ喚びかけていた。

註1 : cf. 「滝野川クロニクル」 HP <https://takinogawachronicle.org/>
松原容子さんの解説。 <https://dekashel.com/takinogawachronicle/about-slides.pdf>

註2 : 「滝野川クロニクル 区境」 映像・編集 / 松原容子 音楽 / 坂井奈桜子 出演
/ 松原卓 <https://www.youtube.com/watch?v=Eu1dXtMXAdc&t=267s>

※関連サイト、関連テキスト

●滝野川クロニクルYouTube（複数の関連動画あり）

https://www.youtube.com/results?search_query=%E6%BB%9D%E9%87%8E%E5%B7%9D%E3%82%AF%E3%83%AD%E3%83%8B%E3%82%AF%E3%83%AB

●「滝野川クロニクル 2022」の振り返り 藤井様の質問へ答える形で 松原容子 <https://note.com/yokomatsubara/n/nffccf34615b1>

●藤井雅実「特異像（シンギュラル・イメージ）としての絵画——〈外〉の／への私的言語の享楽」（『21世紀の画家、遺言の初期衝動 絵画検討会 2018』高田マル・編、所収） <https://kaiga.myportfolio.com/1>

●藤井雅実「〈外〉への共振－哲学と芸術の限界とその〈外〉」

（『Search&Destroy』東京造形大学）以下のサイトでダウンロード・フリー
<http://cs-lab.zokei.ac.jp/labtu/%E9%9B%BB%E5%AD%90%E6%9B%B8%E7%B1%8Dsearch-destroy/>

●藤井雅実「脱臼と共振 美術・機械の乱流」（『GS』vol.4「戦争機械」所収）

●藤井雅実「AIは欲望と情動の地で歌えるか？」（『S氏がもしAI作曲家に代作させていたとしたら？』人工知能美学芸術研究会・編：所収）
https://www.aibigeiken.com/store/sn_j.html